

1 4 分科会 学校と家庭の生活指導

旭川永嶺高校 佐藤理河

共同研究者 橋本尚典 黒谷和志 瓜屋護 井上大樹

司会 佐藤理河

参加者 レポーター5名、高校3名、大学院1名、小学校1名

1. レポート

- ① 「学校と家庭の生活指導」 旭川永嶺高校 佐藤理河
- ② 「子どもが主体の学校づくり 民主主義を取り戻すために～沖縄見学旅行のとりくみ」 網走桂陽高校 山下正浩
- ③ 「メイク指導は合意と納得のもとで」 苫小牧総合経済高校 高野経子
- ④ 「隙間時間にLINEで『グチリンピック』」 特別支援学校
- ⑤ 「最近あった学級内でのこと～生徒同士の相互理解の図り方について」 中学校

2. 討議内容

佐藤、山下のレポートは生徒の自主活動をどう育てるかが課題であった。

佐藤は行事における「部長」の決定や、見学旅行のプロジェクトチーム立ち上げを通して生徒に「自主的に決定する権利」を与え、自分たちが認められるHRづくりを行っている。参加者からは「教員集団の理解や合意があったのか」との質問もあり、学校全体のとりくみをどうすすめるかが課題となった。

山下は教職員から物事の決め方、決められたことを実行し総括するなど民主主義の手続きが消えつつあることに危機感を持っている。見学旅行では各クラス代表の実行委員会を結成し、「私服か制服か」、「クラスを超えた班を認めるか、認めないか」など、あえて面倒な手続きをして決定していった。みんなて揉めて助け合うことに重点をおいた行事をつくる実践だ。

高野は身だしなみ指導について「教員になって一番違和感があるのが身だしなみ指導だ。きっと10年後、化粧や髪色はもっと自由化もしれない。私なりに身だしなみ点検方法を見直したい」と生徒に提示します。「生徒同士が点検をする関係をつくる」という案には生徒は反発します。「身だしなみは総意と納得でやりたい」と発信しても効果はなく、生徒指導部が身だしなみ強化月間のとりくみを行っている。生徒からは「私たちの意見をもっと聞いてほしい」という要望が出てくる。また就職がメインの職業高校において「メイクアップ講座」を開催した。大学院生からは「最近、教育実習で小学生からも『目が二重でいいね』とか服装やメイクについて聞かれることが多くなった。子どもたちが化粧やスタイルなど見た目を重視する傾向が非常に強いと感じる。と同時に外見のコンプレックスに陥っている。自己肯定感を高めて『ありのままの自分で良い』とのメッセージが重要だと感じた」と発言があり、現代の生徒の生きづらさも討論

された。

支援学校からは教員同士3人が超多忙な中、LINEで「愚痴」を共有するとりくみが紹介された。子育てや進路指導、生徒とどう関わるかなど本音で交流がされている。就労支援や進路先のマッチングなど支援学校の課題を交流することができた。

中学校からは「子どもたちの納得をどうつくるか」をテーマに、「3人が文化祭に出ない」事件をきっかけに生徒同士が価値をぶつけ合い、考え解決とはいかなくても合意を作り出す実践だ。10名の2年生のうち3人が「科学の甲子園ジュニア」全道大会に進出することになるが、文化祭当日と重なってしまう。3人は悩むが科学の甲子園全道大会を選択する。劇のシナリオの変更や役柄の入れ替えなどがあり残った生徒は納得できない中、先生は生徒同士の本音の話し合いを計画する。3人が全道大会に参加したいという気持ちを語るうちに仲間からは「応援したくなった、文化祭も成功させたい」という励ましの発言が続く。その中で真面目な生徒が「文化祭に出ないと決めたとき、一番困る自分にいち早く相談するのが筋だろう」と怒りの発言をする。互いの言い分がぶつかり合う。しかし、その生徒は「文化祭の重みも知ってほしい。科学の甲子園が終わったら胸をはって戻ってきてほしい」とエールを送る。生徒の価値をぶつけ合い、納得をどう作るかの実践である。

3. 課題

現在の学校は子どもからいろんなものを奪っていく。自分たちの自治や自由、尊厳などがそうだ。学校に傷つけられる生徒を生ませない、学校から子どもの声を奪わない実践が求められている。まさに、生活指導分科会がその役割をはたさないといけない。

自治を子どもたちへ教え、それを社会へどうつなげるか。さらにルールやマナー・モラルといった社会的規律を思春期の子どもたちとどう考えるか。そのルールに学校はどう対応するのも課題だ。

生徒が何を語り、私たちがどんな言葉を発したか。それが実践レポートにつながる。この積み重ねを繰り返していくことが重要だ。

(さとうりか)